

## 不正に対する復讐

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東郷, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/189">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/189</a>

## 不正に対する復讐

東郷 裕

### はじめに

近代国家の成立以降、世の中の不正（正義に反する行為）に対しては法律が不正を行った者にそれ相応の処罰を与えることで、社会秩序を回復するための正義を実現してきた。しかしそれが叶わない場合、不正に対して私的復讐（private revenge）という手段に訴え、自らの考える正義を実現する者もいる。

この不正に対する復讐というテーマが英国文壇に最初に登場するのはトマス・キッドの『スペインの悲劇』（1585-87）であろう。この作品はエリザベス朝復讐悲劇の幕開けとなり、復讐悲劇という一つの劇様式を確立し、後のシェイクスピア、ターナー、ウェブスターらをはじめとする数多くの作家たちの劇作上の中心的な要素となり、この時代の復讐悲劇の隆盛につながった。しかしながら、クロムウェルの治下で、1642年に劇場が閉鎖され、演劇そのものが衰退の一途を辿る。その後王政復古を迎え、劇場は再開されるが、エリザベス朝盛期のようにはいかず、演劇そのものが衰退し、18世紀には英国文壇の主役は小説へと移る。復讐のテーマが再び文学作品で取り上げられるのは、この小説という新たなジャンルが誕生し、E・ブロンテによる『嵐が丘』（1847）が文壇に登場するまで待たねばならない。

この両作品にみられる復讐は不正に対して行われるが、そもそも復讐の本質について穂積陳重は「復讐は人類の自保性に起因する反撥作用にして、人類が文化高級の域に達し、その国家的生活の組織整備するに至るまでは、実にその存在発展の一要件たりしなり。復讐は存在を害する刺戟に対する反撃にして、高等生物通有の稟性に起因する自衛作用なり。」(83)と説明する。つまり国家成立以前の原始時代において復讐は生まれながらにして人が持つ自己保存のための必然的な行為であると考えられていた。しかし法律や社会制度を持った近代国家が成立し、キリスト教や道徳が社会に浸透するにつれ、復讐は次第に制限される。国家の正義のもとでのみ復讐は合法化されるが、私的復讐は禁止されるようになったのである。

穂積と同様の見解は、英国エリザベス朝期に生きたフランシス・ベーコンの『随想集』（1597-1625）の中にも見られる。彼は「復讐はある種の野生の正義（wild justice）である」（72）と述べつつも、但しこれはカエサルに対する復讐、ペルティナクスの死に対する復讐、あるいはアンリ三世の死に対する復讐といった「公的復讐（public revenge）はたいして好結果になる」が、「私的復讐はそうではない」（73）と指摘している。国家による復讐は正義を実現するが、私的復讐はそれが出来ないということである。さらにまた復讐という考えがいかに反社会的であるかを、エレノア・プロッサーは「エリザベス朝の道徳家たちは復讐が危険であるのは言うに及ばず、違法で冒瀆的、不道徳、非理性的、人道に反し、有害であるとして非難した。」(10)と説明している。

しかしながらこの復讐という考え方は人々の心を捉え、演劇のテーマとして英国エリザベ

ス朝期に確固たる地位を築いて以来、今なお人々を魅了してやまない。恐らくそれは禁じられはしても、復讐は人間に「通有する稟性に起因する自衛作用」であり、文明化された国家の中にあっても「野生の正義」として人々の心の中に共感する意識が残っているからであろう。実際フレッドソン・パウアーズは「適切な法的証拠がないことで法が捕らえることができない不誠実な殺人者に対して、[殺された者の] 息子が行う流血の復讐を非難するエリザベス朝の人達はほとんどいなかったであろう。」(40) と指摘している。しかしだからと言って復讐悲劇に登場する復讐者がすべて非難を免れたわけではない。人々に同情あるいは共感されるべき復讐者とはどのように描かれているか、ということが注目すべき点となる。

本稿では本来ならば関係のない二つの作品、すなわち復讐のテーマの始祖『スペインの悲劇』と、小説として再び同じテーマで数世紀後に登場した『嵐が丘』を取り上げる。そしてそれぞれの主人公であるヒエロニモとヒースクリフがいかなる不正に対してどのような復讐を行い、そして彼ら復讐者がどう描かれているのか、またそれぞれの不正そのものに注目することで何が明らかになるのかを検討していきたい。

## 1. ヒエロニモに対する不正

スペインはポルトガルとの戦争でポルトガルの太守の息子バルサザールを捕虜としてスペインに連行する。宮廷で厚遇を受けた彼は、スペイン王の姪ベル＝インペリアに恋をするが、彼女の恋人アンドレアを戦争で殺したのはこのバルサザール本人である。今現在の彼女の恋人はスペインの宮廷付き司法官ヒエロニモの息子ホレイショーである。彼女の兄でありスペインのカスティル侯の息子でもあるロレンゾはバルサザールと共謀し、ホレイショーを殺害する。

ヒエロニモはいかなる不正に対していつ復讐を決意するのか。自分の息子を殺害されたことに対して、ヒエロニモは最初から復讐を計画していたわけではない。確かにホレイショーの暗殺現場に駆け付けたヒエロニモは息子の亡骸を目にし、絶望の底へ突き落され、嘆きと怒りのあまり、「下手人がわかれば幾分かは嘆きを癒してくれようというもの / なぜなら復讐に私の心はやすらぎを見い出すだろうから」(二幕五場 40-41 行) と述べるが、ここではまだ復讐を決意してはいない。

ベドリングガノのロレンゾに宛てた手紙から、ようやく息子の暗殺事件の全容を知っても、ヒエロニモは怒りにまかせた復讐ではなく、司法官らしくあくまでも法による適切な処罰、つまり国家による公正な正義を求める。

王の御前にまかり出て腹に据えかねていることをいい放ち、  
堂々と宮廷全部に正義を求めて叫ぼう。  
このわしのなえた両足で冷酷無情なものをすりへらし、  
懇願して正義を獲得することにしよう。  
(三幕七場 72-75 行)

ところが息子の死に対する深い悲しみと、殺人者に対する強い憤りがヒエロニモを徐々に精神的に追い詰めて行き、三幕十二場の最初の場面で彼は片手に短剣、片手に縄を持って登場する。彼は公正な審判を求めるために自殺して天上に行くかのように見えるが、我に返って正義を求める道を探る。

さあ、ヒエロニモよ、審判者の許に行こう、  
彼はホレイシヨの死に対しお前の願いを公平に見てくれよう。

…

もし私が自分で首をくくるか剣で自分を刺すとしたら  
誰がホレイシヨの仇討ちをしてくれるであろうか？  
いやだ！ああ、いやだ！赦してくれ、俺はそんなことせんぞ。  
(彼は短剣と絞首索を放り出す) (三幕十二場 12-3, 17-9 行)

その後、ヒエロニモはスペイン国王に直訴して法による正義の実現を試みるが、徒労に終わったことが分かると公正な手段で正義を求めることを捨て、ついに復讐をすることを誓う。

「復讐するは我にあり！」  
そうだ天はどんな悪にも復讐を忘れない、  
また人殺しが、報いを受けないままにいることなどない。

…

「犯罪には犯罪をもって対するのがいつも間違いないやり方」。  
刻みつけるのだ、心の奥底に刻みつけるのだ、お前が害を加えられようとするとき、  
害悪には自ずと害悪をもって対すべきであり、  
死のうなどというのは最もよくない解決法なのだ。

…

そして結びの言葉を言うのならこうだ、この父が復讐をしてやる！  
(三幕十三場 1-3, 6-9, 20 行)

彼にとっての不正とは息子ホレイシヨが殺害され、これに対する適切な処罰が望めないことである。従ってこの場面がヒエロニモが国王や天上に求めるべき正義を捨てて、復讐を決断した瞬間である。

## 2. ヒエロニモの復讐

ヒエロニモは不正に対してどのような復讐を企てたのか。それは彼の「害悪には自ずと害悪をもって対すべき」、「犯罪には犯罪をもって対するのがいつも間違いないやり方」の言葉どおり、ベル＝インペリアと共謀し、劇中劇の中で、犯人のバルサザールとロレンゾを殺害することである。ベル＝インペリアがバルサザールを、ヒエロニモがロレンゾをそれぞれ殺

害し、復讐を果たした時、この劇を見ていたロレンゾの父親カスティル侯とバルサザールの父親ポルトガル太守に向かって、

ポルトガルのお方よ、あなたも私と同じようになくしものをなされた。お子バルサザール様をみてお泣きなさいますのなら、それは私が息子ホレイショーのために泣いたのと同じであります。そして侯爵閣下、…閣下はこの芝居の大団円をばどう耐えられますや？  
(四幕四場 113-16, 121 行)

と問いかける。そしてカスティル侯に殺害の理由を尋ねられると、ヒエロニモは、

かえがたいという点ではホレイショーも私にとりあなた様、そしてあなた様、またあなた様と同様。罪もない倅はロレンゾに殺され、そしてロレンゾとあのバルサザールのため私めもついに仇をうたれました、この苦しみに遥かにまさる苦しみをもって、彼らの魂に天が仇を報いて下さいますよう。  
(四幕四場 169-75 行)

と答えて自害する。最終的にはヒエロニモの復讐とは、「あなたも私と同じようになくしものをなされた。／お子バルサザール様をみてお泣きなさいますのなら、／それは私が息子ホレイショーのために泣いたのと同じであります。」という言葉どおり、「かえがたい」息子の死によって受けたまさに同じ苦しみを殺人者たちの父親にも味あわせることである。ヒエロニモの復讐とは、結局バルサザールとロレンゾを殺害することで、それぞれの父親を自分と同じ境遇に陥れることであった。

### 3. ヒエロニモはどのように描かれているのか

私的復讐という禁忌のテーマを扱いながらも、『スペインの悲劇』を文学作品にたらしめているのは、ヒエロニモが行った復讐行為そのものではなく、ヒエロニモの人物描写の巧みさであろう。石田久によると、主人公が完全な悪者にならないような手法が用いられていると指摘する。

その最大の手法は、復讐の動因となる最初の殺害を受ける人物が優れた品性の持ち主であり、その殺害が復讐の動機として、少なくとも心情的には正当化されるような種類を導入することと、第二には、その復讐の任を負わされた人間の内面的な苦悩とためらいを示すことである。(144)

ヒエロニモの復讐の動機は息子の殺害という正当化しやすく、観客の理解も得やすい。また彼の人物描写は気質喜劇の登場人物のように四体液が人間の気質を決めるという単純化したものではない。息子の殺害によって温厚で理性的な父親は絶望の淵に落ちる。怒りと悲しみが彼を襲い、さらに正義を求めたが叶わない結果となる。この法による正義の実現の挫折が彼に深い絶望感を味あわせ、結局自ら復讐をせざるを得ないほどに精神的に追い詰められ、苦悩するその姿に人々は同情するのである。その上この同情と、法と神とによる復讐禁止の掟という根本的に相反する対立関係から生じる緊張が人々を魅了し、共感を呼ぶのであろう。

#### 4. ヒースクリフに対する不正

ヒースクリフに対する不正とはいかなるものか。それは復讐悲劇によくあるように近親者や恋人が殺害されるのではない。彼にとっての不正とは嵐が丘に住む裕福なヨーマン階級のアーンショウ家の長男ヒンドリが、彼を生まれの分からない、財産もない人間だとして徹底的に排除し、虐げてきたことである。さらに具体的に言うと、ヒースクリフはヒンドリの父親アーンショウ氏がリヴァプールで拾ってきた歓迎されざる孤児であるが、アーンショウ氏は「ふしぎなほどヒースクリフが好きになり、彼の言うことは何でも信用する」(38)ほどに溺愛する。ところが息子ヒンドリはこれを快く思わず、「ヒースクリフは父親の愛情と自分の権利とを盗み取った敵だと考えるようになり、その痛手を思うと、恨みはいよいよ募ってきた」(38)ので、アーンショウ氏の死後、家長となったヒンドリはヒースクリフを「家族から召使の仲間へ追いやって、また牧師補さんの教育も受けさせぬことにして、あいつは外で働かせるのがほんとうだといって、農場でいちばんはげしい仕事の作男なみに、こき使う」(46)ことにする。ヒースクリフは、このヒンドリの嫉妬から生じる差別と、残酷で非人間的な扱いという不正に対して憤るのである。

#### 5. ヒースクリフの復讐

ヒースクリフはヒンドリに対していつ復讐を決意したのか。それは彼が少年の頃、クリスマス晩餐の際に食事も与えられずに独り屋根裏部屋に閉じ込められた時である。彼は自分の決意をネリーに言う。

ヒンドリのやつに返報するのは、どうやればええか、考えとるんだ。いくら長く待っても、しまいにやつつけさえすりゃ、かまわんのだ。おれがやつつけるまで、あいつが死にやがらんように。(61)

これに対して信心深いネリーは「恥ずかしくないのか、ヒースクリフ!」「悪人を罰しなされるのは神様のお仕事だよ」(61)と諭すが、ヒースクリフは「いや、神様なんか、俺が復讐する心持がわかるもんか」、「おれはただ、どうやればいちばんええか、それが知りた

い。」(61)と「神様のお仕事」によって自分の置かれた状況が変わることを最初から期待しておらず、ヒンドリに対する憎しみを露わにする。ヒンドリの不当な扱いに耐え続けることができたのは、ヒースクリフがキャサリンとの関係を精神のよりどころにしていたからだ。だが、そのキャサリンが結婚相手にスラッシュクロス家の長男エドガー・リントンを選んだことによって二十数年間にわたる彼の執拗な復讐は具体的に実行に移される。

ヒースクリフの復讐とはいかなるものなのか。まず、キャサリンの結婚を機に三年間姿を消していたヒースクリフは教養を身につけ、財産を作って嵐が丘に戻る。次にヒンドリは自分の妻の死後、悲しみのあまり「泣きも祈りもせず、怒ってののしり、神も人も呪い自暴自棄の放蕩に身を沈めた」(66)状態に陥る。この時にヒースクリフはヒンドリを賭け事に誘い、ついには「土地を抵当にして[ヒースクリフから]金を借りては、ばくちと飲むことばかりしている」(103)状況に彼を追い込む。そして思惑通りにヒンドリの死後、嵐が丘の土地を含めたすべての資産がヒースクリフの手中に入る。最後にどういう理由か、ヒースクリフはヒンドリの一人息子ヘアトンの養育も引き受ける。これがヒンドリに対するヒースクリフの復讐の結果である。

## 6. ヒースクリフの終わらない復讐

ヒンドリ個人に対する復讐ならば、彼の財産をすべて手中に収めたことでヒースクリフの復讐はここで終わるはずである。しかし、彼は復讐を止めない。では彼の復讐の対象は誰であろうか。彼を裏切って、スラッシュクロス屋敷のエドガーと結婚したキャサリンであろうか？彼女は復讐の対象ではない。ヒースクリフは自分の復讐についてキャサリンについて語る。「君に手をかけて復讐しようとは思わない」、「そういう計画ではない。暴君は奴隷を踏みつぶすが、奴隷は彼に反逆しようとはせぬ。自分より下のものを苦しめるのだ」(112)。つまり彼の復讐とは、ヒンドリ本人のみならず、彼の息子であるヘアトンに自分が受けた同じ精神的、肉体的苦痛を味あわせ、自らと同じ過酷な人生を歩ませることである。彼がヘアトンの養育を引き受けた理由はここにある。

キャサリンが一人娘キャシー（キャサリン・リントン）を産み落として死んだ後、ヒースクリフの復讐はさらに激しさを増していく。ヒースクリフはヘアトンを召使同様どころか、動物並みに扱い、教育の機会を与えず、粗野で無教養な若者に育てる。同時にエドガーの妹イザベラを誘惑し駆け落ちするが、彼女にも虐待の限りを尽くす。そしてイザベラとの間にできた病弱な一人息子リントンを使ってキャシーを誘い出し、無理やり二人を結婚させる。息子リントンが死ぬと今度はリントン家のスラッシュクロス屋敷を含めて資産すべてをまたヒースクリフが手に入れる。

ここで指摘しておきたいのは、ヒースクリフのこの一連の復讐行為、すなわちアーンショウ家とリントン家の資産を獲得したその手続きすべてが合法であり、違法な私的復讐ではないという点である<sup>1)</sup>。そしていよいよ彼の監督下で生活しているヘアトンとキャシーを徹底的に貶めていけば二十数年にわたる復讐が成し遂げられるという時に、復讐を止めてしまう。復讐を止めた理由は復讐の対象であるヘアトンとキャシーの中に愛情が芽生えているこ

とを認め、そこに自分とキャサリンの姿を重ね合わせ、復讐の虚しさに気がついたからである。彼はキャサリンの霊と一体になることを願って、食事もせず眠りもせず自らを死に追いやり、復讐の幕を自ら閉じる。

結局、ヒースクリフの行った復讐とは、彼に対して「聖者をでも悪魔にしてしまうほどの」(66) 扱いをしてきたヒンドリに向けられたものだけではなく、嵐が丘とスラッシュェクロス屋敷の資産を獲得し、両家の子孫を自分が受けた同じ境遇に陥れ、差別と苦しみを味あわせるものであった。自分の受けた過酷な経験を相手にも同じく与えるという点ではヒエロニモの復讐と同じ結果であると言える。

だが、出自の分からぬ孤児だという理由で、ヒンドリがヒースクリフを差別・排除し、彼の人間性をも否定するというこれら正義に反する行為、すなわち不正の問題は彼だけに帰することができる問題ではない。ヒースクリフがヒンドリの向こう側に見ていた不正とは、リントン家とアーンショウ家、つまり両家に代表される当時の英国社会の閉鎖的かつ因襲的な階級構造が抱える問題であり、これこそが彼にとっての「暴君」であるからだ。だからこそヒースクリフの復讐はヒンドリだけでは終わらず、その象徴であるアーンショウ家の子孫のヘアトンとリントン家の子孫キャシーをも虐待し、自分と同じ境遇にまで貶めるまで続ける必要があったのである。

## 7. ヒースクリフはどう描かれているか

ヒエロニモの人物描写の巧みさ故に復讐のテーマを扱いながらも人々の同情と共感を得ることができたと指摘した。一方のヒースクリフはどうであろうか。確かに彼の復讐は執拗で情け容赦なく、躊躇もなく、正義と不正の間で揺れることもない。さらにカラー・ベル(シャーロット・ブロンテ)が1850年版 *Wuthering Heights* の序文で言及しているように、ヒースクリフは「悪魔の生命が人体に注ぎ込まれたもの」(4) として映し、イザベラの言うとおりに、「ヒースクリフは人間なのか?」「もし人間でないとすれば、悪魔なのか?」(136) という印象を与える。彼は孤児で、物語に登場した当初から「よごれた、ほろをきた、髪の毛の黒い子供」であり、「しきりに何やらべらべらたわ言みたいなことをしゃべる」(36-7) ので、異国から来た異教徒、あるいは異端児を連想させる。

また家政婦ネリーの語りがヒースクリフに対する誤った人物像を想像するよう誘導する。彼女は人がよさそうで教養もありそうだが、実は彼女はヒンドリ同様、ヒースクリフを嫌っていて、「二人でいじめて、いやなことばかり、しかけてゆきました」(38) と告白しているし、キャサリンがエドガーとヒースクリフに対する自分の正直な気持ちをネリーに打ち明ける場面においても、ネリーはヒースクリフが近くにいることに気が付いていても知らぬふりをする(Chapter IX)。またネリーはヘアトンがヒースクリフによって、動物のような生活をさせられている時も、ヒースクリフには示さなかった同情と愛情を彼には示しているのである(Vol. II Chapter IV)。

しかしヒースクリフの真の人物像を僅かながら見ることができる。それはヒースクリフによってあれ程の虐待を受け続けたはずのヘアトンの存在が雄弁に物語る。ヘアトンはキャ



シーがヒースクリフの悪口を言うのを制止するし (Vol. II Chapter XIX)、何よりもヒースクリフが死んだときに「誰よりも多くの害を受けた、気の毒なヘアトンひとりが、ほんとうに悲嘆にかきくれて」、「夜通し遺骸のそばに座って、心からさめざめと泣いた」(335)のはヘアトン唯一人である。このヘアトンが示すヒースクリフへの愛着の中に、作品中には描かれていない二人の関係が想像され、ヒースクリフの人間性の一部が垣間見えるのである。この二人の関係の中になぜかに示されるヒースクリフの人間性に共感を覚えることができるかどうかがこの作品の評価の鍵となるであろう。

## 8. 不正に対する復讐

ヒエロニモは息子を殺害されという不正に対して、自らの正義を実現するために復讐を実行した。一方ヒースクリフに対して行われた不正とは、ヒンドリの非人間的な扱いと虐待がもたらす彼の人格の否定と、出自を理由にした差別であり、これらが動機となって復讐は行われたが、結果はヒエロニモの復讐の結果と同じであった。

ただし、ヒンドリのこのような行為は不正であるだけでなく、普遍的な問題をも提示している。まず人格否定の問題である。人格の否定によって破壊されるのは自己の尊厳である。人間が自己の尊厳を持つことができるのは、自分の存在を他者が承認する場合である。人格の否定の問題点は平等な人間として認められないということにある。次に差別の問題である。自分の属する共同体から差別・排除されるということも個人の存在が承認されず、身近な共同体において自分が社会的な意義のある存在だという意識が否定される。この共同体による差別・排除の問題点は、自己の帰属意識が育たず、自己を正しく評価・尊重できず、自己否定につながることである。この人格否定と差別・排除の行為は世の東西を問わず、時代を超えて存在する普遍的な問題であろう。復讐が正義を実現するための手段とするならば、ヒースクリフが目指した正義とは、すべての人間はその出自に関わらず、等しく扱われねばならないという現代に通じる人権尊重の理念である。

『スペインの悲劇』と『嵐が丘』は同じ復讐のテーマを扱っているというだけで単純には比較することはできないが、あえて不正に対する復讐という視点で両作品を見ると、その手段は違法な私的復讐から合法的な復讐へ、その対象は危害を加えた当事者から、社会構造に内在する人格否定と差別・排除へと変化している。これはエリザベス朝からヴィクトリア朝への時代の変化、つまり演劇から小説への表現技法の変化、神と個人の関係から社会と個人の間わり方、さらに人間のあり方への関心の変化といった複合的な要因が考えられるだろう。いずれにせよ、いかなる不正に対してどのような復讐を行ったのかという視点で両作品を読み、復讐の契機となった不正に着目すれば、その内容の変化のみならず、そこには現代に通じる問題も含まれていることが理解できる。

## 註

- 1) Sanger, C.P. *The Structure of "Wuthering Heights" in Wuthering Heights: An Anthology of Criticism*. Compiled by Alastair Everitt. London: Frank Cass & Co.Ltd.,1967. pp.200-1 を参照。

## 引用文献

- Bacon, Francis. *The Essays*. London: Penguin Books Ltd, 1985.  
Bowers, Fredson. *Elizabethan Revenge Tragedy 1587-1642*. Princeton: Princeton University Press, 1966.  
Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. London: Penguin Books Ltd, 2003.  
穂積陳重『復讐と法律』（岩波文庫、2011）  
石田久「復讐劇崩壊の予兆」（『エリザベス朝の復讐悲劇』収蔵 英宝社、1997）  
Kyd, Thomas. "The Spanish Tragedy." In *Renaissance Drama: An Anthology of Plays and Entertainments*. Ed. Arthur F. Kinney. Massachusetts and Oxford: Blackwell Publishers, 1999.  
Prosser, Eleanor. *Hamlet and Revenge*. California: Stanford University Press, 1971.

【付記】 *Wuthering Heights* の翻訳は阿部知二訳『嵐が丘』（岩波文庫、2001）を、*The Spanish Tragedy* の翻訳は齋藤國治訳『スペインの悲劇』（中央公論事業出版、1968）を参考にした。